

スタンダード研究会会報

(2002) No. 12

2002.06.01

目 次

| | |
|-----------------------|------|
| 研究会発表要旨 | |
| ・ 「スタンダードとラヴァテール」 | … 1 |
| ・ 「ヴァルノ、もう一人のジュリアン」 | … 1 |
| ・ 「スタンダードの反共和主義について」 | … 3 |
| ・ 「スタンダードとオリエント」 | … 7 |
| 「スタンダードとの付き合いをふりかえって」 | … 9 |
| 会員活動報告 | … 20 |
| 会員名簿 | … 21 |
| 後記 | … 23 |

【研究発表要旨】

第 31 回 (2001. 05. 20 於 上智大学)

スタンダールとラヴァテール

粕谷 祐己

ラヴァテール Johann Caspar Lavater (1741-1801) はスイスの神学者であるが、観相学 physiognomonie の考案者として後世に名を残している。人間の顔からその性格、本質が判断できるとする彼の主張は、結局児戯に墮するものであり、今日ではまともに相手にする者もいない。またドイツ語を母語とするスイス人とあっては、フランス人が積極的にその著作を研究する気になれないのも無理はないかもしれない。しかしパリ大学医学部教授 Moreau de La Sarthe が編集した大部のフランス語版 *L'Art de connaître les hommes par la physionomie* (1806-1809) がバルザック、サンドを始めとするフランスの文人たちの大きな関心を集めたのは文学史上紛れもない事実である。スタンダールも、少なくとも著作活動の初期には大きな影響を受けており、たとえば『イタリア絵画史』には *L'Art de connaître les hommes* からの多くの引用が見られるのである。

スタンダールにおけるラヴァテールの影響の本質を見極める作業は、まだまともに手がつけられていないと言っている。第一、Champion 版『イタリア絵画史』の Paul Arbelet の注でさえ、スタンダールが使用しているラヴァテールの本の版を間違えている。アルブレは、同じ年、同じ本に四折本と八折本の両方が出版されていたことに最後まで気付いていないのである。以後スタンダールのこの著作にあらたな批評版を作る人が現れていないため、アルブレの誤りがそのままになっている形であるが、このことだけを見ても、スタンダール研究には基礎的なところで欠けているものがあるのが明白であろう。

第 32 回 (2001. 12. 22 於 京大会館)

ヴァルノ、もう一人のジュリアン

小野 潮

ヴァルノという人物は、『赤と黒』において非常に重要な役割を果たしているにもかかわらずこれまで比較的軽視されてきた。しかし仔細に検討してみると、主要登場人物、ジュ

リアン、レナール氏、レナール夫人、マティルド、ラ・モール侯爵、そしてジュリアンの保護者とも言えるシェラン師、ピラール師を除いて考えるならば、ヴァルノはその登場頻度、また筋の展開に果たす役割において群を抜いた登場人物であり、その上ジュリアンの宿敵でもあり、仇敵たる兄弟とも言うべき人物であることが見えてくる。本小論の目的は、ヴァルノの人物像を詳細に検討し、これとジュリアンの人物像を対比することによってスタンダールの小説観の一端を明らかにすることである。

スタンダールの自伝『アンリ・プリュラルの生涯』において言及される彼の小説作品は『赤と黒』のみであり、話題になる登場人物はジュリアン、ソレル老人、ヴァルノのみである。ヴァルノについては、そのモデルについて語られるとともに、ジュリアンについて語っている場合にもそこにはヴァルノの影がちらついている。またスタンダールがフィレンツェの雑誌『アントロジア』に掲載するために書いた『赤と黒』の紹介文においてもヴァルノについての言及は数多く、そこではヴァルノはレナール氏とならんで1825年の地方の有産階級を代表する人物とされ、この紹介文の筆者はレナール氏、ヴァルノ氏から目を離さないようにと読者に忠告している。ヴァルノはスタンダールにとってどうでもよい端役の人物群とは一線を画した人物であったことは間違いない。

小説の本文を検討してみると、ヴァルノは小説の早い時期から姿を現し、そして小説の最終部分でも姿を現すか、あるいはジュリアンによって言及の対象にされる。彼は彼の姿がまったく姿を現さないブザンソンの神学校を描いた場面でも思いもかけず言及の対象となり、またパリのラ・モール邸にも姿を現している。ヴァルノの存在は小説の全体を通じて維持されているといっても過言ではない。その存在の大きさだけでなく、また筋の展開において果たす役割の重要さからいってもヴァルノは無視できない。レナール氏がジュリアンを家庭教師に雇おうとするのはヴァルノが新しい馬を買ったことへのレナール氏の対抗心がきっかけとなっている。ジュリアンがレナール家を離れざるを得なくなるのは、ヴァルノがレナール氏にあてて書いた密告の手紙が主要な原因である。そして小説の最終部分において、ジュリアンに死刑の判決が下るのはヴァルノの意図によるものであり、彼は自らの口でジュリアンを死刑に処すべしという陪審員の意見を述べるのである。

ヴァルノの小説の筋の展開における重要性は以上の通りだが、そのヴァルノとジュリアンを比較対照してみると彼らの間に意外な類似性があることに気がつかされる。一番重要な類似点は彼らの出自の卑しさと、周囲の耳目をひきつけずにはおかない彼らの社会的上昇の華々しさである。二人とも貧しい境涯から出発し、そして最終的には貴族になりおおせる。こうした人物はこの小説中ではこの二人しかいない。しかし彼らをそれ以上に似た者にし、しかも彼らをライヴァル関係におくのは彼らとレナール夫人の関係である。彼ら以外の誰が町一番の美貌の夫人であり、彼女が将来受け取る予定の財産においても町一等の夫人であるレナール夫人をあえて口説こうなどという大胆さを持ちえるだろうか。ヴァルノが夫人を口説いていた時期にはジュリアンは父親のところで小僧扱いされていた子供に過ぎず、ジュリアンが夫人と関係を持っていた時期にはヴァルノが夫人に言い寄っているなどということはまるでないにもかかわらず、彼らは夫人をめぐるライヴァルとして記述されており、この一点をはずしては彼ら相互の憎しみ、とくにヴァルノのジュリアンに対する憎しみは説明のつかないものになってしまう。

このジュリアンとヴァルノの間の類似は彼らのそれぞれを形容することはを仔細に検討

していくことによってさらにはっきりする。それは beau, grossier, effronté, odieux, fier, sot, audacieux, impudent といった語である。むろんこうした形容はその形容が誰の口を借りて行われているか、また同じ人物、あるいは語り手によってなされているにしてもどのような意図によってなされているかによってその意味合いが変わってくるのは当然のことだが、それにしてもヴァルノについての形容とジュリアンについてのそれは、激しい対立を見せながら、他方で思いがけない重なりを見せることも事実なのである。要するにジュリアンは「崇高なヴァルノ」であり、ヴァルノは「卑俗なジュリアン」なのである。

もちろんジュリアンとヴァルノを分かつものも数多くある。それは身体的特徴、名誉に対する感情、弱者に対する哀れみ、金銭に対する関係、他者と群れることへの嫌悪といったものである。

ヴァルノはジュリアンと非常に対照的な人物であるが、その対照は他方で彼らの思いがけない類似に支えられている。そして小説全体におけるヴァルノの役割は19世紀の現実を示すことである。ヴァルノは19世紀フランスを代表する人物であり、19世紀は「レナール、ヴァルノの世紀」なのである。スタンダールは『赤と黒』の中で、ジュリアンのように才能をもった青年の未来を開くのは恋愛などではなく、党派にしがみつ়くすべをもった青年が成功するのだと述べている。ヴァルノはこうした青年の姿を戯画的なまでに誇張した姿であろう。こうした人物と類似関係をもちながらそれとはまったくちがった道行をすることで「美しい嘘」としてのジュリアンの姿は読者にいっそう明瞭に印象づけられることになるのである。

第32回(2001.12.22 於 京大会館)

第33回(2002.03.27 於 京大会館)【再論】

スタンダールの反共和主義について

下川 茂

スタンダールがその反共和主義の根拠として挙げているもののうち、現在でも注目に値するのは、フランス革命の第一共和政の人間「再生 régénération」思想の問題である。『リュシアン・ルーヴェン』と『ある旅行者の手記』における「再生」思想批判を、1967年 *Revue des Sciences Humaines* 誌上で取り上げた Michel Crouzet は、スタンダールをドストエフスキーに結びつけている。

しかし、スタンダールは、第一共和政の本質的な危険性を指摘しつつ、その一方で、『ナポレオンについての覚書』等では、諸外国の干渉戦争から革命を救うために恐怖政治は必

要だったとしている。これは、恐怖政治と戦争を分離して論じた *Des effets de la terreur* (1797) における Benjamin Constant より明らかに後退している。スタンダールの論理は、恐怖政治を状況によって弁護するもので、François Furet が *Penser la Révolution française* (1978) で批判した典型的な「状況理論」である。「状況理論」は恐怖政治を担った者たちの理論であると同時に、後の共和主義的歴史家たちの理論でもあり、例えばティエールのフランス革命史も同じ立場を取っている。それに対して Furet は、恐怖政治と戦争はフランス革命の人間「再生」思想に内在するものと考えている。

スタンダールの「再生」思想批判は徹底していない。『ある旅行者の手記』の、「共和主義者は良識ある意図を持って権力の座につくだらうとは思いますが、まもなく怒りだし、人間を再生させようとするだらう」という「再生」思想批判は、それ以上理論的に展開されることなく、逆に、その後、批判を打ち消すかのように、革命と帝政時の英雄たちの賛美が続く。『リュシアン・ルーヴェン』では、「再生」思想批判を口にするのは父ルーヴェンとファリ將軍であって、主人公でも語り手でもなく、その批判も、『ある旅行者の手記』同様、展開のない単なる指摘にとどまっている。そして、別の箇所だが、七月王政の「卑しい風習」を怒る語り手は、「共和国の無私の美德」と「無私の共和主義者」「ロベスピエール」の賛美を行い、「再生」思想批判を共和主義賛美によって相殺する。スタンダールは、その自由主義的、個人主義的傾向にもかかわらず、共和主義者の無私の美德に対する倫理的賛美から生涯逃れられなかった。共和主義=無私=美德という政治・倫理的図式にとらわれている限り、たとえ「再生」思想の危険性を指摘しても、無私の共和主義者が恐怖政治を行った第一共和政を徹底的に批判することはできない。従って、Crouzet のようにスタンダールをドストエフスキーと結びつけるのは行き過ぎである。

将来フランスに実現する可能性のある共和国に関しては、スタンダールは、第一共和政とは大きく異なるイメージを描き、そのモデルとしてしばしばアメリカ共和国を持ち出した。金銭を崇拜し、芸術に無縁の俗悪なブルジョワや庶民が有権者として支配する国、民主主義を標榜しながら奴隷を持つ国アメリカ。祖国愛に満ちた無私の共和主義者が支配する第一共和政とは正反対に、アメリカでは、俗悪で利己的な個人が自由な経済活動に邁進し、しかも、そこでは狂信的な信仰（ピューリタニズム）が支配し、古代の共和国と同じように個人の自由が制限されている。このようなアメリカ共和国のイメージをフランスの未来の姿であるとするスタンダールは、さらに、すでに七月王政下でフランスのアメリカ化は一部実現しているとさえ主張した。

スタンダールは、アメリカの文化不毛と経済中心主義、狂信的宗教の支配と個人的自由の制限等の欠点を、誇張し、固定化し、さらに、それらを共和政そのものの欠点とした。しかし、それらは共和政そのものの欠点ではなく、共和政の不完全さに由来する欠点である。奴隷制度も個人の自由の宗教的規制も現在のアメリカには存在しない。このスタンダールのアメリカ像の歪みには、無私と美德の第一共和政への共感・賛美の影響がある。第一共和政は、対外的にも対内的にも常に戦時体制にあり、人間「再生」という理想主義的ユートピア思想に憑かれた、非常に特殊な例外的な共和国だった。当時のアメリカがある程度実現し、またその後フランスでは第三共和政が徐々を実現することになる、個人的自由と両立する安定した政治制度としての近代的な共和政の可能性をスタンダールは無視し、共和政そのものを批判する。対外戦争に勝利し国民的栄光をもたらした第一共和政のエネ

ルギーと倫理的威光に幻惑されているスタンダールは、第一共和政以外の共和国の可能性を認めない。「フランス的陽気」「旧体制の陽気」を懐古する最晩年のテキスト『恋愛論』序文3（1842年）でも、スタンダールは、「1793年のエネルギーな政府」を「英雄的な政府であり、帝政政府の「立派な前奏曲」であるとみなし、フランスの「イギリス化」とそれによる「旧体制の陽気」の喪失の責任者は、「1793年の政府」・総裁政府・帝政のいずれでもなく、王政復古政府と七月王政政府、とりわけ後者であるとしている。「イギリス化」はアメリカ化とほぼ同じことを意味するから、ここでも七月王政=アメリカ共和国であり、それらと第一共和政が対立する。

王政復古と七月王政はフランス議会政治が定着し始め、同様に資本主義的な経済活動が本格化した時代である。スタンダールが晩年に生きた七月王政下のフランスは、すでに、アメリカ同様、俗悪で利己的な個人が競い合って経済活動に邁進する社会と化しつつあった。『1836年には喜劇は不可能である』では、「野心、羨望、恐るべき貧困」の存在しなかった「1739年の気楽な幸福」、身分制に基づき各人が生涯のコースを予見できた時代の幸福をスタンダールは懐古し、1836年ではなく1739年に生きたかっただけとしている。しかし、もはやひどい悪弊はないから「93年」もありえないとして、恐怖政治の「状況理論」による擁護を維持し、その上で、過去にもどることは不可能であり、七月王政下の共和主義者はどんなに狂信的な者でも「靴屋シモン」よりましだとして、フランスが「旧体制の陽気」を取り戻す可能性に言及している。例によって、フランスの未来像としてアメリカを暗く否定的に描き出し、しかも「いささか危うい仮定」とした上であるが。しかし、そこには第一共和政が「旧体制の陽気」を破壊しなかったという記述はない。

第一共和政が「旧体制の陽気」を破壊しなかったという『恋愛論』序文3の主張は成り立つだろうか。1811年9月2日の日記に早くもスタンダールの旧体制ノスタルジーが現れるが、そこでは、旧体制の陽気・幸福をフランス革命が破壊したとしているだけで、第一共和政の免責の記述はない。現実には第一共和政は旧体制の崩壊に最も貢献した、最も革命的な政府だったから、『恋愛論』序文3の主張には無理がある。この無理には、加速するフランスのアメリカ化に対する反撥と、その責任を第一共和政に負わせたくないという心理が働いている。旧体制ノスタルジーと第一共和政に対する共感という真っ向から対立する二つの面を、第一共和政は旧体制の陽気を破壊しなかったと強弁することで強引にスタンダールは両立させる。

Mona Ozoufの最近の書 *Les aveux du roman. Le dix-neuvième siècle entre ancien régime et révolution* (2001)の副題が示しているように、19世紀フランス全体が旧体制と革命に引き裂かれていた。しかし、スタンダールの二面性の特徴は、旧体制対立憲王政ではなく、旧体制対第一共和政として、二面が両極化し、しかもその両極の間を不安定に揺れること、すなわち一方から他方へ突然転調すること、またときには強引に両極が両立させられているところにある。

このスタンダールの二面性の特徴の原因を彼の個人史に探ると、父母との関係が浮かび上がってくる。『アンリ・ブリュラーの生涯』では母の政治的立場は注意深く隠されているが、彼女は夫同様、王政主義ないしは立憲王政主義だったと思われる。母への愛をめぐって父と対立したスタンダールは熱烈な共和主義者となるが、そうすると父と同じ王政主義者の母とも対立することになる。対立を解消しようとするればスタンダールは自らも王政

主義者になるしかない。『アンリ・ブリュラーの生涯』でも、家族の教育の結果、歴代のフランス王に好意的な見方をするようになっていたことが述べられている。しかし、母の立場に同化し王政主義者に転向すると、今度は父と同じ立場に立つことになり、父との対立が消滅する。母の愛を父と争っているスタンダールは父との対立を放棄するわけにはいかない。父と対立するためには共和主義者でなければならず、母との対立を避けるためには共和主義者であってはならない。母と同化するためには王政主義者でなければならず、父と対立するためには王政主義者であってはならない。スタンダールは、共和主義者であり続けることも王政主義者であり続けることもできない。靴屋シモンによって獄中で共和主義者に転向した王太子ルイが、母を近親相姦と反革命の陰謀の罪で告発し死に追いやるのは、スタンダールの母の死後のことだが、この事件もスタンダールの不安定な二面性を強化したと思われる。シモンの名が、旧体制ノスタルジーと反アメリカ共和国と「93年」の三者が現れるテキスト『1836年に喜劇は不可能である』に登場するのは偶然ではない。スタンダールの不安定な二面性の根源には、常に彼を脅かし不安にさせる父母との関係が存在する。

スタンダール個人から視野を広げると、元高等法院弁護士の息子であるという彼の出身を無視できない。スタンダールの父は貴族ではなかったが、ほとんど自らを貴族視していたことが『アンリ・ブリュラーの生涯』で語られている。そして、『1836年に喜劇は不可能である』で、スタンダールは、1739年と1836年を比較する際、旧体制のブルジョワの代表として法服貴族を登場させている。スタンダールは、旧体制には「野心、羨望、恐るべき貧困」が存在しなかったとしているが、この旧体制の美化されたイメージには、旧体制の受益者であった法服貴族の感じ方が反映している。また、帯剣貴族に対しては平等を要求し、ブルジョワや民衆に対しては貴族的に振る舞う法服貴族は、旧体制の受益者であると同時に改革派でもあるという二面性をもっている。しかし、スタンダールの父やムーニエ、バルナーヴの例が示すように、法服貴族的出自は必ずしも共和主義に人を導くとは限らないから、スタンダールの二面性の過激で不安定な性格の原因は、やはり彼の父母との関係に求めるべきだろう。そして、父母との関係に動かされず、バルナーヴに共感し、立憲王政主義の面を見せるときのスタンダールにおいて、法服貴族的性格が支配的になっていると考えられる。

スタンダールのアメリカ共和国に対する反撥、嫌悪は、現代フランスの根強い反アメリカの問題とも関連する。経済・社会・文化の様々な領域で国家による介入や保護を求めがちなフランスは、近代的な共和国となって100年以上たった今でも、その深層では旧体制と革命に引き裂かれているのではないだろうか。

スタンダールとオリエント

井出 勉

スタンダールにとって《オリエント》とは何か。読書や幼年期来の体験がその原点だとしても、ナポレオンのエジプト遠征がもたらした影響は計り知れない。そのエジプト遠征やスタンダールにも影響を与えた 18 世紀末の旅行家ヴォルネーの『シリアとエジプトの旅』(1787)に代表される著作を始め、シャンポリオン弟が解読したヒエログリフも《スタンダールのエジプト》の関心となって、旅行記や自伝で繰り返し言及される。

ナポレオンは、ヴォルネーの著作をオリエントで勝利を得るための参考書として利用した。スタンダールも『ナポレオンの生涯』でヴォルネーの著作以外に参考文献としてヴィヴァン・ドノンの『ボナパルト将軍の遠征に際しての上下エジプトの旅』(1802)を挙げている。ドノンの本は刊行されるや大評判となり、エジプト熱(エジプトマニ)の口火を切ることになる。さらに、シャトーブリアンが『パリからエルサレムへの旅』(1811)で高く評価したドノンの描いたデッサンは、1809 年から 1828 年にかけて出版された『エジプト誌』に結実して、エジプト熱はさらなる広がりを見せる。

しかしナポレオンのエジプト遠征は、さらに重要な成果をもたらした。それが、1799 年のロゼッタ・ストーンの見発見である。ヒエログリフ解読の糸口となったこの世紀の見発見は、スタンダールの生地グルノーブルと深い関わりのある、シャンポリオン兄弟の名を後世に残すことになる。ヒエログリフの解読をおこなったシャンポリオン弟は、スタンダールと同じくグルノーブル中央学校で学んでいる。しかも、シャンポリオン兄弟の後ろ盾になったのが、1802 年にイゼール県知事になったジョゼフ・フーリエである。スタンダールも面識があり、その悪印象が『リュシアン・ルーヴェン』の知事セランヴィルのモデルになったといわれる人物である。ヒエログリフ解読については、スタンダールは『ローマ散歩』(1829)で短く触れている程度であるが、故郷グルノーブルで学者生活を送ったシャンポリオン弟に対して、スタンダールがどの程度の関心を抱いていたのかは想像するほかないが、無関心であったわけではないことが分かる。

エジプトを、さらにはインドをも視野に入れていたナポレオンの夢と同じく、スタンダールの《オリエント》もインドへと広がっていく。そこには、博物学者・旅行家であり、一時期親しく交わったヴィクトール・ジャックモンが存在がある。そのジャックモンが旅立ち没した地がインドであったことの持つ重要性は、これまでの研究で看過されていないだろうか(スタンダールはジャックモンを『アンリ・ブリュラーの生涯』では「インド人」とさえ形容している)。実際、インドに関するいくつかの逸話が旅行記の中で紹介されているし、『イギリス通信』で取り上げたインドにおけるジュイ氏の冒険談を、『エゴチスムの回想』でも繰り返している。これには、インドが同時代人にとっての楽園としての憧れの地であっただけでなく、インド成金(ナバブ)を輩出した、いわば《インディアンドリーム》の地でもあったことがその背景にあるのではないだろうか。同時代のバルザック

も『金色の眼の娘』(1835)や『セラフィタ』(1835)ではインドへの憧れを、さらには『ウジェニー・グランデ』(1833)では、シャルル・グランデが運命を賭け成功した東インド貿易を描いている。もちろんベルナルダン・ド・サン=ピエールの哲学小説『インドの藁屋』(1791)やジョルジュ・サンドの『アンディアナ』(1832)もその作品の反響やタイトルからいっても重要である。スタンダール自身が実際に読んだかどうかは別にしても、エジプトだけでなくインドも、当時の人々の心性に強く訴えていたことが理解できるであろう。このように当時インドが流行の地であったことは、当然ながらスタンダールに、タッソーの『狂えるオランダ』のヒロイン、アンジェリカの生国としてのインドも想起させる《幻想》の地となっていくのである。

スタンダールの《オリент》とはどこなのか。『19世紀ラールス大辞典』の定義もあいまいで、エジプト、トルコ、インド、アジア、アフリカといった広範な地域を含んでいる。スタンダールは、こうした《オリент》には実際に足を踏み入れていない。それゆえ19世紀の他の作家たちが、次々と自分の目で確かめて、《幻想》と《現実》の狭間でオリентを自己確認の場にしていくスタンスとは明らかに違う。むしろ進歩的な18世紀のヨーロッパ人として、《幻想のオリент》に、これも19世紀にブームであった《博物学》的関心を持ち続けたとよいのではないだろうか。実際、スタンダールは同時代のシャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅』(1811)やラマルティーヌの『東方旅行』(1835)には無関心で、18世紀末のヴォルネーやナポレオンのエジプト遠征の方に強い関心を抱いている。さらには、敬愛した祖父アンリ・ガニヨンが、まだ幼いスタンダールにしてくれたエジプトの話や、図書館のために買わせたというミイラを見せてくれたことなどは、『アンリ・ブリュラーの生涯』に書き残すほど強い印象を与えている。《博物学》は19世紀の60年代をその黄金期とするといえるが、逆に《オリентに対する趣味》、つまり《オリエンタリズム》は、《orientalisme》という語の初出が1830年であることから、19世紀の後半に向けてますます勢いを増していく。スタンダールは、19世紀の《博物学》と《オリエンタリズム》の狭間で作品の中に《オリент》を投影してきたといえる。したがって、ナポレオンのエジプト遠征からインドに至るスタンダールの《オリент》は、異国のものに対する《博物学》的要素を無視しては成り立たない《幻想》の地なのである。

今回の発表では、当初、『アルマンヌ』、『赤と黒』、『リュシアン・ルーヴェン』、『パルムの僧院』といったロマネスクな作品に描かれた《オリент》を中心に据えた作品分析を試みる予定であったが、旅行記や自伝を軸にした小説作品以外を考察したものに終始した。いずれ機会を改めて、小説作品におけるスタンダールの《オリент》について論じたい。

〔以下の文は、昨年上智大学での研究会のうちに、松原雅典先生からお話いただいたものです。研究会では時間の制約もあって、お話を途中で端折ることになりました。今回、『会報』用に「要旨」をお送りいただいたのですが、内容の性格からして「要旨」では魅力が半減すると考え、編集者の判断で全文掲載させていただきました。掲載の許可をくださった松原先生にお礼申し上げます。〕

スタンダードとの付き合いをふりかえって

松原 雅典

三週間前、後平さんからスタンダード研究会で何かしゃべってくれないかと言われ、差し当たりしゃべる材料もないので、最初はお断りしたのですが、粕谷さん一人では寂しいとのことで、二年前退職時に、所属した法学部の教員と大学院の学生に話したものの原稿があるので、それでよければということで引き受けた次第です。

出版されたばかりの『スタンダードの小説世界』について助成金のお礼を兼ねて、私とスタンダードのかかわりを話しました。学部の紀要には退職する教員の経歴、業績一覧などが載り、私もそれを書かされたばかりで、改めて自分の一生は何だったのだろうと考えていたりして、この際、自分なりに整理してみたいという気もありました。

同年に退職して、私と経歴、業績などを並べて記載される教員は大学での入学は同期でしたが、エリート・コースを絵に描いたような男で、外務省を振り出しに、途中で教員になり、学部長、学長、専務理事をつとめ、さらに他の大学の学長の椅子が決まっているのに対して、私の方はおよそ長と名の付くものに無縁の一生でしたので、ひときわ落差が目立ち、スタンダリヤンの私としてはアンリ・ベールが昔の同僚で大臣や上院議員になった友人に対して抱いたであろう感じをもたねばならない局面でした。もっともこれは冗談で、その時点では紀要も発行されておらず、そのエリートの経歴の詳細も後で知ったことで、そのときは恒例になっている話の材料をどうするか四苦八苦し、うまい材料の見つからぬままに、助成金出版の説明をかねてスタンダード研究の話をしてお茶をに濁しました。

今回このコーズリーを引き受けたのも、『アンリ・プリュラル』を書いた作家同様、あの世に行く前に自分が何だったか一応整理してみたいという気持があったからです。身近な人々が少しずつ消えていきますので。

私がこれまでスタンダードを語るときは、私的な思い出のようなものは一切交えずきましたが、私のスタンダードへの接し方のスタンスは普通の研究者とかなり異なっているのではないかと思います。一番の違いは、普通の研究者は文学好きで、またスタンダードを対象に選ぶに際して、この作家に強い愛着をもっていることではないでしょうか。私にはそれがありませんでした。第二に、私がスタンダードに最初に接したのが、三十歳近くになってからでした。私は二十歳代をほとんどフランス語と断ち切られた生活をしました。こうしたこと自体は別に他人様に話すようなことではないし、話すこともありませんでしたが、ただ自分自身の研究生生活を反省する場合、それを根本のところまで規制しているファ

クターとして避けるわけにはゆかないように思いました。

時間が限られていますし、首尾一貫した研究でもないので、雑談的に話せるところまで話し、時間がきたら打ち切りにしたいと思います。どこで終わるか分かりませんが、尻切れトンボになるのをあらかじめお断りします。

《スタンダール以前》

そういうわけで最初にそういったスタンダールとの変則的な接し方をもたらした事情をお話したいと思います。私は旧制浦和高校の文乙というのに入りました。ドイツ語が第一外国語のクラスです。中学時代（旧制で5年）は、ほとんど社会的、政治的、思想的な動きには興味がなかったのですが、高校では寮生活のせいもあり、思想的な強い風にさらされます。同期生にのちに教養学部自治会の初代の委員長になる大野明男がおり、なかなかのアジテーターで今の小泉首相のようなさっそうとした感じで鮮明な印象が残っています。個人的には、特別政治の話もしませんでしたが、知らずに影響を受けていたようです。私には映画監督の叔父がいて、終戦後の飢えの時代でしたので、飯にありつくためによくその家に入出入りしていたのですが、勤め人の他の伯父などと違って、学生の私にはちょうどいい話相手でした。当時映画関係には左翼の人が多く、彼も一、二年後にレッド・パージで会社を追われますが、私は生き方の上でかなり影響を受けました。彼はミュンヘンで映画の勉強をしてきたのでドイツ語ができたのですが、私のもう一人の伯父が中学やパリ時代を通じて久生十蘭と親しく、この監督の叔父も尊敬していて、文学ならフランス文学の方がおもしろいだろうとっていました。そのころフランス文学ではロマン・ロランの生き方に興味をもった程度でしょうか。旧制高校は一年で廃止され、新制の大学に変わりますが、教養学部ではドイツ語、フランス語のクラスに入りました。クラスには清水徹や高階秀爾がいました。

このころ大戦中のフランスの抵抗運動が紹介されはじめ、自分の戦争中の体験と重ね合わせて、こんな世界もあったのかと、目を開かせられる思いでした。その時は駒場でしたが、本郷の五月祭にしてみると、仏文の展示に抵抗運動が取り上げられていました。そのころ『世界文学』という雑誌で矢内原伊作の『抵抗詩人アラゴン』を読み、探していたものが見つかったような気持ちになり、早速紀伊国屋にいて、アラゴンの著作で手に入るものはすべて取り寄せてくれるように注文しました。仏文にゆくことに決めたのはアラゴンを読むためでした。駒場では、はじめのうちはおとなしくフランス語の勉強をしていましたが、だんだん周りの社会情勢が厳しくなり、特に二年になると朝鮮戦争が起こったり、授業料値上げ反対闘争などがあって、黙って本を読んでいればいいという雰囲気ではなくなりました。アラゴンの原文はまだとても読める力はありませんでしたが、翻訳が出はじめ、アラゴン自身が政治的なアンガージュマンを要請していました。

はじめは深入りする気はありませんでしたが、いろんな状況が重なって、足を抜けなくなってしまいました。それでもまだ寺田徹先生の『アドルフ』を読んだ記憶がありますので、二年までは授業に出ていたのでしょう。

一応仏文学科に進学しましたが、成り行きである政治組織に加入することになり、本郷ではほとんど授業に出ることなく、二年たって、授業料不払いで除籍されました。その後

数年して、状況が変わり、活動していた組織から解放されました。その時はもう同期の人々から六年も遅れており、私も大学の卒業は考えていませんでしたが、さしあたり何をしたいのか分からず、鈴木信太郎先生に復学できるかどうかうかがうと、授業料を納めればよいとのことでしたので、また大学に入り直すことにして、身の振り方はその間に考えることにしました。そのころは親からの仕送りも、奨学金も途絶え、もっぱらアルバイトで生きてゆかねばなりませんでした。

《卒論をめぐって》

ところで卒業するためには卒論を書かねばなりません。アラゴンは中学の同級で早稲田の仏文にいった友人がもっていったきりで、コンタクトがとれず、そのころは食べていくのがやっとで、高い洋書を買えば余剰もなかったし、フランス語も忘れてしまっていて、買ってすぐには読みこなせない。翻訳のある作家を探しました。といってもキャンパスから遠ざかって本を一切読んでいなかったのを見当がつかず、当時親しかった友人の子安宣邦（日本思想史の研究者として、宣長など書いていますが、当時仏文にいてディドロをやっていました）に相談しました。理由は忘れましたが、彼はスタンダールを勧めてくれました。アラゴンが『スタンダールの光』を書いていたのも多少縁があるかと思ひ、それに決めました。

これでやっとスタンダールにだとりついたのですが、中学のとき『赤と黒』を読んで、マチルドがジュリヤンの生首に口づけするシーンに気持ちが悪くなったという印象しか残っていません。どう取り付いていいのかわからず、ともかくも読み直しましたが、こんども感動というにはほど遠い状態でした。ジュリヤンの出世主義が幼稚に思えましたし、レーナル氏から屈辱を与えられたといつて夫人を誘惑するのは卑怯に思えましたし、貴族の令嬢に気に入られて出世するのもしやでした。いわんや誘惑を「義務」とするなど屁理屈も甚だしいように感じられ失望しました。アラゴンによれば、ジュリヤンのタルチュフ的な行為は弱いものの戦う武器だというのですが、納得できませんでした。当時私の気持ちに一番ぴったりするのは『チボー家の人々』でしたが、どういうわけか卒論の対象と考えませんでした。

こうしてスタンダールは、はじめわたしには問題のかみ合わない、反感をそそる作家でしかありませんでした。困ったことになったと思いましたが、あれこれ考えている余裕はないので、少なくとも翻訳で読めるものは全部読むことに決めて、まず小説『アルマンス』『リュシヤン・ルーヴェン』『パルムの僧院』『カストロの尼』などを読んだのですが、印象は意外なものでした。『赤と黒』から予想していたのは一癖も二癖もあるひねくれた人物でしたが、そこに見いだしたのはジュリヤンのような出世主義者でも誘惑者でもなく、義務感の強い、あるいは率直な、好感のもてる青年でした。『赤と黒』が他の諸作品とは異質な、例外的な作品であることが分かるとともに、なぜこんな例外的な作品が生み出されたのか、興味をそそられ、それが私の卒論のテーマになりました。

アラゴンのスタンダール論の核心はタルチュフの解釈にあります。ティボーデもまた、タルチュフを鍵にして『赤と黒』を論じていました。私はこのキー・ワードに注意して、再びスタンダールの諸作品を読み直しましたが、ここでアルセストとタルチュフが対概念

として論理の展開がなされているのに気づきました。とくに『アルマンズ』の主人公オクターヴは意図的にアルセスト、「人間嫌い」として性格づけられていて大変明快でした。

小林正先生が指導教官でしたが、運よく当時発表されたばかりの鈴木昭一郎氏の初期演劇研究を紹介してくれました。鈴木さんの論文をたよりに私はスタンダールの初期演劇作品と『フィロソフィア・ノヴァ』を丹念に読みました。そこに私は自分の求めていたものがすべて見いだされたという感じをもちました。スタンダールの戯曲はそのものとしては失敗しましたが、それを読むと青年時代のスタンダールが何をもとめていたのか、実によく分かります。彼は啓蒙主義とフランス革命の理念に忠実で、ナポレオンの専制主義と反動的なカトリックの復活に反対していました。演劇はこの思想を劇化するためのものであり、大革命の理念に忠実な者を正直な人間でアルセスト、後者の主人公はナポレオンの手先でタルチュフと規定されています。

後期の小説はもちろん、スタンダールの人生経験によって豊かに肉付けがなされていますが、前期の理念がそのまま保持されているのが見られます。当時はまだ『アルマンズ』が『二人の男』の筋立てを受け継いだことには気づきませんでした。少なくとも理念と人物の形象の基本が、青年期の演劇と二十年以上たって創作された小説とで合致するのを認めました。そして『アルマンズ』から数年後に書かれた『赤と黒』は前作とまったく逆方向であり、前作を意識的に反転させた、極めて実験的、挑発的な作品に思われました。この三作に共通して義務という言葉がキー・ワードとして用いられていますが、『アルマンズ』と『二人の男』では、公共の利益に奉仕するという意味に、『赤と黒』においては、自己の理念を世間的な思惑に妥協させずに貫くという意味に用いられています。本来アルセストたるべき主人公がタルチュフの仮面をまとおうのはそのための武器としてです。毒をもって毒を制するようにタルチュフをもってタルチュフを批判するのがスタンダールの意図だと思いました。これが卒論の内容でした。

こうして何とか卒業の資格は得ましたが、年齢も三十歳近くになっていて、普通の就職は無理で、これも友人の子安のおかげで、彼の勤めていた機械関係の業界雑誌の出版社に入りました。社長が戦前、左翼の活動をした経験があり、学生運動をして卒業後行き場のなかった学生に同情的で、やはり仏文出で、バルザックをやリ、あとでロラン・バルトを訳すようになった沢崎などもいました。しばらくして高校の先輩がやっていた宣伝の会社が変わったりして、数年間サラリーマン生活をつづけましたが、自分を打つめめるような感じをもてず、結婚もして子供もいましたが、新規蒔きなおしをすることにきめ、一足先に大学院に入っていた子安や沢崎を真似て会社をやめました。一年ほど日仏学院などに通ってフランス語を勉強しなおし、どうやら大学院に入れました。

《大学院時代》

大学院では、スタンダールが初期演劇、絵画史、恋愛論、その他の評論類を通して結局、小説という形式を発見する筋道をたどりましたが、日記、手紙、自伝の類を丹念に読みました。これで後期の小説の人物の性格、人物構成の原型の由来を確認できたように思います。

大学院時代の勉強で、その後のスタンダール研究に役立ったものが幾つかあります。当

時小林先生は『「赤と黒」成立過程の研究』を出版されたところでしたが、『クーリエ・アングレ』の中でもとりわけ風俗風刺小説と女流作家の小説が詳しく紹介されており、『赤と黒』がそれらの伝統を引き継いでいることが実証されていて、私も先生の著作を頼りに『クーリエ・アングレ』を読みました。これは先駆的な研究で、現在でも当時のフランスの社会・思想・文化状況を知るうえで『クーリエ・アングレ』の重要性は汲み尽くされていないと思います。

前田陽一先生がパスカルの『パンセ』のテキスト・クリティックをしておられましたが、私にはそれに付随して読んだアンリ・ルフェーヴルの『パスカル』が研究方法を考える上で参考になりました。

小場瀬卓三先生の『モリエール研究』のレポートの課題がルソーの『演劇論（ダランベールへの手紙）』（これは現在『ルソー全集』で西川さんの翻訳と解説で読めます）の批判で、これはスタンダールの初期演劇を考える上で大変役立ちました。というのはファール・デグランチーヌはルソーの演劇論の忠実な実践者で、スタンダールはこのファールをモリエールと並べて高く買っていて、『二人の男』はファールの『家庭教師』の焼き直しだからです。小場瀬先生にその『戯曲集』をお借りして、スタンダールの評価している『モリエールのフィラント』と『家庭教師』を読むことができました。

《金沢大学時代》

大学院を出ると、井上究一郎先生の紹介で金沢大学に奉職することになり、これでどうやら生活できるようになりましたが、このときはもう三十五歳になっていて、普通の研究者より十年遅れた出発でした。普通なら仮に教職につくのが十年遅れたとしても、その間留学したり、助手をしたりと研究生活は継続しているはずですが、私の場合はフランス語と完全に切れた期間が十年近くありましたので、致命的でした。

ネオフィットの特徴で、卒業時から大学院時代にかけて熱狂的なスタンダリヤンでした。スタンダールは最初私にとって、アンガージュマンの文学研究の根拠でしたが、そのころはむしろデガージュマンのモデルになってくれました。もともと文学や映画などの刺激で、政治的なものに目覚めたはずでしたが、朝鮮戦争、左翼政党への弾圧といった時代に政治活動にしたがっていたときには、文学、音楽、絵画、映画演劇などの享受と無縁なストイックな生活を余儀なくされました。大学に戻った時点でどうやら喫茶店でレコードを聴く程度の余裕ができ、アパートの近くの『モーツァルト』という名の喫茶店に毎日通いました。名前どおりそこではよくモーツァルトがかかっている、スタンダリヤンにはありがたい店でした。音楽の素養がないので聴くというよりぼんやりしているだけでしたが、スタンダールの好みを感覚的に知ることができました。

金沢ではもっぱら大学院時代のものを活字にするだけでした。紀要しか発表の機会がなく、しかも予算が限られていて、細切れにして活字にしていると、修士論文の内容を活字にするのに数年かかりそうでした。最初の一、二年はジッドの『背徳者』のように、生きている感覚だけを楽しみました。他方、多少生き方について考える余裕が出てくるとともに、スタンダール風の生き方が時代錯誤ではないかという漠然とした疑念が兆してきました。ベトナムで戦争が行われていましたが、ベ平連の事務局長の吉川勇一は高校の同期

で、かつて私が捕まって小管に拘置されていたとき、労農救援会のメンバーとして面会にきたのが、活動の発端でしたし、私の結婚式の司会をしてくれた高橋武智は立教の教職をすてて、米軍兵士の脱走を助けていました。人それぞれの生き方があり、私も十年の歳月を無駄にしたあとで、再び政治に手を出す気はまったくありませんでしたが、スタンダールについてルーチンとなった論文を書き続けること自体、何の意味があるのだろうかといった疑問です。スタンダール自身は少なくとも同時代人の最前線の文学、思想を知った上で、批判していました。スタンダールの精神を生かすとすれば、現在の問題を見つめることではないのかという疑問です。

《離脱の試み》

大学のころ、前に名前をあげた子安、沢崎、高橋などとアンリ・ルフェーヴルの『美学入門』などを読んで、わりと親しんでいたのですが、彼の『日常生活批判』をたまたま機会あって、一部、共訳することになり、ルフェーヴルのものをまとめて読みました。このころはまたロラン・バルトなどにも興味があってそのころまでに目を通しました。

このころ論文は相変わらずスタンダールについてでしたが、大学院のころの延長で新しい勉強はしておらず、逆に離脱の道を模索していました。六八年にフランス語のスタージュで初めてフランスの土を踏みました。今でこそ行きたいと思えば明日にでも行けますが、そのころは私の金沢大学での初任給が三万円で、パリ往復が五十万円の時代です。

この年は五月革命と呼ばれる学生の異議申し立ての行動の起きた年で、ソルボンヌやオデオン座などに落書きが残っていました。この年のスタージュはすべてピレネーのふもとのポーで行われました。週に一度ぐらいの割合でエクスカションがあり、ガヴァルニー、バイヨンヌ、ピアリッツ、サン・セバスチアン、ルルドなどピレネーを巡る各地に連れて行ってもらい、今まで写真でしか知らなかった教会堂や城を実際に目で見て、文化史的な興味をそそられました。それだけでなく、辺鄙な小村の広場の石やソルボンヌの壁面に刻まれたおびただしい第一次世界大戦の戦没者の名前にも感銘を受けました。

最初のフランス滞在は四ヶ月しか許されませんでした。そこでルフェーヴルの『ピレネー』という著作を見つけました。ルフェーヴルはマルクス主義者ですが、ニーチェやシェリングに親しんだ人で、初期マルクスの疎外論を手掛かりに硬直した公式的なマルクス主義に新しい風を吹き込んでいました。当時の学生運動や都市の問題にも積極的な発言をしています。ところでピレネーはルフェーヴルの生まれ故郷で、かつこの地方の実証的な研究から彼自身の社会学者としての経歴を始めたということもあって、著書『ピレネー』は単なる理論でもなく、また当座のガイド・ブックでもなく、彼自身にとっても愛着の深い本のように思われました。

ルフェーヴルは比較的親しんできた思想家であり、それにピレネーは何より、私の最初のフランスとの接触の地として忘れ難い印象を残した土地なので、この本を翻訳したいと思いました。そして私はこのあたりからスタンダールに別れを告げようと思っていました。この本はピレネーの文化をローカルな特殊性で見るのではなく、全体としてオック語をもとにした南仏文化圏に属するものとして考察しています。中世にはオイル語の北仏文化圏

に対峙し、洗練された固有の文化をもっており、たとえば宮廷風恋愛も北仏の知らなかったものといえます。この南仏文化圏は教皇と結んだ北方諸侯のカタリー派討伐によって根絶やしにされます。以後ピレネーは絶えず中央集権を強める北方文化的な政権に対するイデオロギー的な抵抗思想としてのプロテスタント、ジャンセニスムなどの拠点になり、弾圧の対象となってきました。ルフェーヴルは富の蓄積と生産性、技術、実務と官僚制を重視する北仏文化に対し、料理やおしゃべりなど生きる楽しみ、遊びを重視する南仏文化を復権しなければならないと主張します。彼は自然の征服、収奪を考えるテクネーに、時間・空間を自分のものとして楽しみ、自然と調和して生きるポイエーシスの概念を対置します。

こうした視点は南仏をイタリアに置き換えればスタンダールのイタリア賛美、フランス批判に重なるので、これをもとにいつかスタンダールのフランスとイタリア文化比較論を考察してみたいと思っていますが、当時はむしろスタンダールからの脱出地点としての意味をもっていました。

その後私は成蹊大学に移ります。ルフェーヴルのこの本は出版社の都合で出版が遅れ、クロード・エルセンの『ホモ・エロチクス』（他人のしりぬぐいなのですが）の翻訳を先に出しますが、ここでトリスタンとイズーに関連してルージュモンの『愛と西欧』が引かれています。ルージュモンは宮廷風恋愛をカタリー派と同じ根から生じたものとしています。この説は否定されていますが、カタリー派については、ルフェーヴルもヨアキム・ダ・フィオーレと並んで『ピレネー』において取り上げて論じていて、一時かなり興味をもちました。その後の在外研究の際にもスタンダールはそっちのけにしてカタリー派からサン・マルタンなどのエゾテリスム関係の文献を集めました。どうも私は何かに興味をもつと、のめり込んでしまう癖があって、いつも失敗します。

この間にクロード・ロワの『絵画への愛』を共訳して、ゴヤ論の部分を担当しました。学生のころ生島先生の訳の『スタンダール』を愛読していて、ロワも好きな評論家でしたが、ゴヤ論を訳したのもルフェーヴルの南仏文化論の刺激で地中海からスペイン、ロルカやスペインの内戦などに興味があったからでしょう。『ピレネー』（『太陽と十字架』）の翻訳は出版社を転々として七九年にやっと未来社から出してもらいました。

《スタンダールへの回帰》

『ピレネー』を出版して一区切りついたところで、この七、八年を振り返ってみると、右往左往しているばかりで、大して仕事をしていないうちにいつの間にか年齢も五十歳に近づいていることに気づきました。これまでの仕事を振り返ると、新しい領域に手を出せる年齢でもなく、能力もないことも分かりました。というわけで、結局また「自分の畑を耕す」ことに戻ります。自分の年譜を見ると七九年以降八四年までの五年間は、活字になったものは皆無で、業績の点ではまったく空白をなしていますが、この間、入試の責任者などで一年間何もできなかったのを除けば、スタンダールの周辺をうろうろしていました。スタンダールへのウォーミング・アップの時期です。

ロワのゴヤ論を訳した関係で、ゴヤに興味をもっていましたが、ゴヤの描いた肖像画を見ると、『パルムの僧院』の登場人物の挿絵に使いたいような絵がたくさんあります。その少し前に堀田善衛の『ゴヤ』が出ておもしろく読みました。堀田は社会的な背景の中で、

ゴヤの創作活動を描き出していますが、堀田に倣い、七月革命とそれを準備する 1820 年代の社会的、思想的な動きの中でスタンダールが『赤と黒』にたどり着くまでを書いてみたいと思い、その資料集めのつもりで、『エゴティズムの回想』の中に引かれる人々、あるいは同時代の人々、ドレクリューズ、ジャックモン、メリメ、ヴィテ、サトン・チャープ、アンソロ夫人、アルマン・カレル、キゾーなどの回想録や研究書から、サント・ブーヴの時事的な評論、ユゴーの手紙、シャトブリヤンの回想のようなものを拾い読みしました。スタンダールはシャトブリヤンを嫌っていますが、*Mémoires d'outre-tombe* を実際に読んでみると、いろいろおもしろい発見があります。たとえばカレルは共和主義者で、スペインに義勇軍で参加したり、ボナパルチストの反乱計画に加わったりして、王党派のシャトブリヤンとはイデオロギーが違いますが、シャトブリヤンはサント・ペラジーの監獄などに投獄されたカレルを見舞いに行っていて一般に彼について作られているイメージと異なって意外でした。

こういう点で、たとえばベランジェなど高く買っているのに、投獄されたベランジェをメリメなどが見舞いに行っているのにスタンダールは行っていないはずで、性格の違いを感じました。大作家を捕まえて、律儀でないと非難しても始まりませんが、実際の行動を調べてみると、書いていることだけでは分からない意外な側面が現れてきます。七月革命の行動でも、私には獵官運動に走り回ったスタンダール、あるいはグローブ紙周辺のドクトリネールより、知識人の使命について思いめぐらしていたサント・ブーヴの方が共感できるものでした。スタンダールの方ではサント・ブーヴに強い好意をもっていたのにサント・ブーヴの方がスタンダールに冷たかったのが分かります。

イタリア関係ではアンドリアーヌ、ペリコなどを読みました。私はスタンダールの著作についてはもっぱら小説について書いてきましたが、小説はあまり好きではないようです。スタンダールのもので『アンリ・ブリュール』の方が好きですし、メモワール類や日記などを読んで調べている時間が一番楽しく過ごせます。

五年の空白期間のあと、八四年から八九年にかけての五年間に、『パルムの僧院』、『赤と黒』(第二部)、『リュシヤン・ルーヴェン』、『ラミエル』、『赤と黒』(第一部)の成立問題について書きました。以前の『アルマン』と併せて、一応スタンダール長編小説の成立についての私なりの展望が得られたと思います。『イタリア年代記』は多少ともイタリア語を勉強してからと思いましたが、成立問題を扱うことになったのは、どうも私はゆったりと小説を鑑賞できず、どうしてもルーツを押さえないと気になる癖からでしょう。

『赤と黒』第二部の成立については渡辺一夫先生の『戦国明暗二人妃』のマルグリット・ド・ナヴァールの話を読んで興味をそられたのが発端だったかと思えます。デュマの『女王マルゴ』を読んだり、ちょうど映画を見て、マチルドとマルグリットの強い結び付きに思い至り、ルーツをたどって、『ラシーヌとシェイクスピア』の中の『アンリ三世』を調べてみようと思いました。鈴木昭一郎さんが『スタンダール全集』の『アンリ三世』の解説で重要な発言をしています。「『赤と黒』の謎めいたヒロイン、マチルド・ド・ラ・モールは、じつは『アンリ三世』に登場してもよかった女性ではないのか」という問題提起です。私もまったく同感です。ある意味では『アンリ三世』が完成できなかったのも史実に拘束されて、好きな型の女性を動かせないためだったと思います。その点ではヴィテの『バリケード』などは史実を会話体に直すだけで、本人も演劇としてよりも世人の歴史教育を意

図したといっていますが、スタンダールは恋愛関係がないと満足できないようです。

こういった訳で、スタンダールの『アンリ三世』に関連して、ヴィテ、デュマの『アンリ三世の宮廷』などを読みましたが、あまり手掛かりがつかめないで、渡辺先生が引いておられるレトワルやアグリッパ・ドービニエ、ブラントームなどを読むことにしました。

レトワルは二宮敬さんから借りました。これは余談ですが、渡辺先生の旧蔵書で表紙に「*Le vent printanier souffle. Je pense à la mort.*」と書かれていて、意外な感じがしました。先生は大江健三郎やその他の秀才に囲まれていて、私のような劣等性には近づきたい存在で、道長のように我が世の春を謳歌していると思っていたので、マルゴを書きながら、死のことを考えているとは思いませんでした。死というと、アグリッパを借りた成瀬も『死を前にした人間』の翻訳を出版した直後に死んでしまいました。マルグリットはボニファス・ド・ラ・モルの生首を抱いて車に乗せて墓地に運んで埋め、またサン・ジュリヤンという大工の息子を小姓に取り立てて愛しており、さらにマチルドはマルグリットという名前をもっているため、マチルドをマルグリットの化身と考えてみました。

『リュシヤン・ルーヴェン』の主人公をメリメと結び付けたのは、それまでフランスにもなかったと思いますが、ビブリオフィル版の『ルテリエ』の最後のページを見ると、「モスクワで考え、メリメに提案して断られたこの芝居の筋から小説を作ること」とあります。ディヴァン版では、この文章がなく、気がつかないのですが、それ以後の小説を探すと、デュ・ポワリエがリュシヤンを中傷し陥れるのが、ルテリエがシャペルを中傷し陥れるのに似ています。『ルテリエ』の最後のプランの登場人物のモデルがメリメとドレッセル夫人となっており、『リュシヤン・ルーヴェン』のグランデ夫人のモデルをドレッセルとしているので、メリメの書簡などを参照して人間関係をたどっていくとおもしろいように符合するのが分かりました。ウオーミング・アップの時期にメリメ関係のものを集めたり、読んだりしていたので、わりと簡単にゆきました。この時初めて大岡昇平さんに紀要の論文を幾つか送ったのが読んでもらえて、「『ルテリエ』が『リュシヤン・ルーヴェン』に流れ入ったという指摘に思わず膝を打った」という返事をいただきましたが、富永さんの返事にもまったく同じ表現の「膝を打った」とあり、印象に残りましたが、みな『ルテリエ』の行方は気になっていたのが分かりました。

これらの論文を書く過程で幾つものおもしろい問題、あるいは私なりの発見がありましたが、これらは『スタンダールの小説世界』にまとめてありますので、ここで話するのは省きます。ただ一つ、トリックスターの問題についてだけ触れたいと思います。

私は以前から、『アルマンズ』のスーパーヌ、ボニヴェ、『リュシヤン・ルーヴェン』のデュ・ポワリエ、『ラミエル』のサン・ファンといった人物が気になっていました。奇怪な道化役で、作中での役割としては、主人公を陥れる、しかも主人公を嫉妬で狂わせる点で、シェイクスピアのイアゴの血をひいているのが分かりますが、何でスタンダールがしつこく繰り返すのか不思議でした。いかにも悪者といった感じのするこれらの人物は古めかしい感じがして、取り除いてしまった方がすっきりすると思ったのです。

私はスタンダールの小説の原型といったものに関心をもってきたので、これがルテリエの系譜につながるのが分かりました。そして『ルテリエ』が『リュシヤン・ルーヴェン』に流れ入ったことも突き止めましたが、そもそも彼がなぜルテリエのごとき人物にこだわるのか依然謎でした。デュ・ポワリエまではまだ他人を陥れる悪人の要素が強いのですが、

サンファンになると道化性を強めます。シェイクスピアや『ラモーの甥』に関連して道化には興味があり、関係ありそうな本を幾つか読んでみましたが、納得できるものが見つかりませんでした。『ラミエル』論を書いているとき、たまたま以前に読んだ山口昌男氏の『アフリカの神話的世界』の「いたずら者(トリックスター)」のことを思い出して読み直し、納得がいったように思いました。山口によるとトリックスターというのはこれまでの秩序(コスモス)を混乱させ、カオスをもたらすものであり、宇宙を再生させるための仲立ちとして必要不可欠の人物だということです。はみだしものの特権で世俗的な倫理観に拘束されず、自由な行動で日常的なものの可能性をひきだす役割をもち、秩序(コスモス)のバランスを取ります。バランスの機能に注目すると、世俗の倫理観がプラスの場合、トリックスターはマイナスの現れ方をし、世俗の倫理観が見る者にとってあまりにマイナスの場合、トリックスターはプラスの人物として現れます。ジュリヤンもはみ出しものという点ではトリックスターです。彼は見る人の倫理観によってプラスにもマイナスにも見える点がおもしろい点です。

大江健三郎は山口のトリックスターの理論に強く共鳴していますが、『小説の方法』の中でトルストイの『戦争と平和』の主人公ピエール・ベズーホフ、大岡昇平の『野火』のヒーローの行動をトリックスターとして説明しています。トルストイも大岡もスタンダールの『パルムの僧院』を高く買っており、二人とも戦場を彷徨する人物をおそらく『パルムの僧院』を意識して書いているでしょう。大江はファブリスには言及していませんが、原型のファブリスに一層よく適用されるはずです。

かつてヴァレリーがスタンダールの人物を軽薄なオペレッタの人物にたとえ、スタンダール自身をエスプリはあるが、軽薄な大道野師ゴディッサールにたとえ、桑原武夫先生がそれに反撥して、スタンダールはルソーの流れを汲むまじめな精神だと主張していたのを思い出します。二人ともトリックスター的人物をペジョラティフにっていたわけですが、これで積極的な役割を見る視点が得られました。

私は一時、手に入る限りの山口の本を読みました。彼も書き過ぎて繰り返しが鼻について読むのをやめましたが、最初期の『神話・祝祭・歴史』のトロツキー論には強い印象を受けました。そこでは彼自身がトリックスターの概念を使っておらず、スケープ・ゴートという言葉で説明していましたが、そこに描き出されたトロツキーの風貌がジュリヤンに似通っているのに驚きました。多分そう思っているのは、まだ世界で私一人でしょうが、「なるほどジュリヤンというのは世が世ならトロツキーになった」というのが、私の感じでした。山口の本をよく読んだのは今思えばこのショックも大きかったのかもしれない。レーニンを巡るトロツキーとスターリンは、ラ・モル侯爵を巡るジュリヤンとヴァルノの関係に重なるように思えました。トロツキーもジュリヤンも相手を教養のない、まともにライバルたりえない人物として軽蔑していて、相手の陰での策謀に無警戒なまま足をすくわれます。

トリックスターの概念を通してみるとジュリヤンとサンファンの関係がよく理解できるように思えます。スタンダール自身の自画像をプラスにデフォルメすればジュリヤンになり、マイナスにデフォルメすればサンファンになります。スタンダールが死の直前までサンファンにこだわったのは象徴的です。自分ではそのことに気づかず、サンファンを追いつめてゆくところがオイディプスに似ていて、なるほど大作家というのは無意識が意識を

越えた表現を与えるものという印象をもちました。

八九年に『「赤と黒」とモーツァルトの「フィガ口の結婚」』を書きましたが、これは『赤と黒』第一部の成立論であると同時に、『赤と黒』の本歌取りとしての読みのおもしろさへの意識的な着手でした。本歌取りについては丸谷オーの『後鳥羽院』から多くを学びました。この本に限らず、小説のおもしろい読み方については丸谷氏の著書(『忠臣蔵とはなにか』『6月16日の花火』)に多くを負っています。

偶然の機会から九二年に『「赤と黒」の解剖学』を出すことができました。スタンダールが死んだのは五十九歳ですが、私はやっと六十歳を過ぎて最初の本を出すことができました。せいぜい紀要の論文を束ねて一生の思い出にしようと家内にルリユールをならいにいってもらっていたのですが、六十歳になってから三冊本を出せましたが、みな偶然です。いつか連合赤軍の浅間山荘の銃撃事件のテレビを見ながら、出だしが私と似たような動機だったであろう青年の行き着いた果ての残酷な結果にフォルチュヌの気まぐれを思いました。

私の四十年あまりのスタンダールとの付き合いを振り返ると、最初のほぼ十年がスタンダールなら何でも、次の十年がスタンダール以外なら何でも、次の十年が仕事としてのスタンダール、最後の十年が遊びとしてのスタンダールということになるでしょう。

最初にお話しましたように、私は二十歳代をまったく不毛な生き方をしました。これが高橋和巳や野間宏や大岡昇平のような作家ならマイナスの条件そのものを優良株に転じる契機をつかめたでしょうが、研究者の私はそれを不良債権として括弧にくくった生活しかできませんでしたが、ある意味では括弧にくくった空白部を何とか救済しようというのが密かな動機として私を動かし続けてきたのかも知れません。しかし難しく考える必要はなかったのかも知れません。利害打算を離れてばかな行動ができるのが青年の特権であり、『パルムの僧院』が擁護しているのもそのばかな行動です。それが分かっただけでもスタンダールを知ってよかったといえます。

研究活動報告(2001年4月1日~2002年3月31日)

(今回ご報告いただいたもので、スタンダールに関するものに限って掲載させていただきました。また、本研究会での発表要旨等、すでに『会報』に掲載されたものについては省略させていただきました。ご了承ください。)

井出 勉

「スタンダールとオリエント」、『愛知産業大学短期大学紀要』第14号、2001年12月

岩本和子

「アンリ・ベールとその妹ポーリーヌ」(14)『流域』第50号、青山社、2001年

内田善孝

「《アルマンス》執筆過程の検証(1)」、『成蹊大学一般研究報告』第31巻、2001年10月

「《アルマンス》における女性抑圧と性愛(1)」、『愛知県立芸術大学紀要』第30号、2002年3月

小野 潮

「ヴァルノ、もうひとりのジュリアン」、『中央大学文学部紀要文学科90号(翻訳)フィリップ・ベルティエ『スタンダール、バルザックとイタリア』中央大学人文研究所ブックレット、2002年2月

下川 茂

「スタンダールと国家 『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』から」、『立命館経済学』第50巻第5号、2001年12月

« Le « *Te Deum* » de *La Chartreuse de Parme*: essai sur la déformation stendhalienne des sources historiques », 『立命館文学』第573号、2002年2月

杉本 圭子

« La question des genres chez Stendhal : le cas des *Mémoires d'un touriste* », thèse de doctorat (Nouveau Régime), soutenue à l'Université de Paris III, le 29 mars 2002, 367p.

鈴木 昭一郎

『《評伝》劇作家スタンダール』青山社、2002年3月

高木 信宏

「『赤と黒』の創作過程 着想と制作時期の再検証」九州大学フランス語フランス

文学研究会『ステラ』第20号、2001年9月

羽成 優

« Les réflexions stendhaliennes sur les catégories dramatiques et lyriques (I) » 『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要』第6号、2001年12月

後記

『会報』第12号をお届けします。

まもなく『スタンダード変幻 作品と時代を読む』と題して慶應義塾大学出版会から論文集が刊行されます。これはひとえに、困難な交渉から煩雑な事務作業まで処理してくださった後平隆、岩本和子両氏、そして慶應義塾大学出版会の乗みどりさんのおかげです。心からお礼申し上げます。

* * *

今回は、残念ながら新刊紹介や書評に投稿してくださる会員がいませんでした。そのかわり、昨年研究会で松原雅典先生がお話くださったものを全文掲載させていただきました。示唆に富む知見がいたるところに散りばめられていることは言うまでもありません。先生が歩んでこられたスタンダード研究の道のりを通して、それぞれの時代の風景がうかがわれるようで感動的でもあります。

* * *

今回も原稿をお寄せくださった会員諸氏に感謝いたします。次号にむけて活発な投稿をお願い申し上げます。

(柏木 記)

スタンダード研究会事務局

〒657-0011

神戸市灘区鶴甲 1-2-1 神戸大学国際文化学部 岩本研究室 (078-803-0804)